



織大夫の鬼界^ケ島私見

中 野 孝

五月の文樂座では總帥古靱大夫の長局よりも、却つて織大夫の俊寛の方に心惹かるるものが多かつた。だがきいてみると實に亂暴至極のカットで、いくら時間の都合だとはいへゝゝんなひどいものを強ゐる事は殺生だと義憤すら感じてゐる。きくところによると師の古靱はむしろ前半だけでもよいからぬかずに語れといつたそうだが、それでは又、人形が遣へない所で結局あゝいふ事に納まつたものらしい。この前昭和五年の正月四ツ橋文樂の竣工記念興行に、これを古靱が上演した時は、あゝいふやまのない俗耳には入り難い皮肉物を、わざと見物を捨てて自分だけが楽しむで語る淨瑠璃、おのれが語つておのれがきく淨瑠璃を語る事に徹底した事が成功の因だつたと石割さんは當時演藝月刊誌上で述べてゐられたがそれはそういふ結構な藝境に至り得てゐる人にしてはじめて可能な事であるのは勿論ながら、又あの時のやうな好條件を俟たなければ演れない事であるのは申すまでもない。今度の織大夫にあまりに多くを望みすぎるのは心なきわざと言はな

ければならない。だがこゝにいふ惡條件にもかかはらずやれるだけは全力をつくしてやつてくれた。精一杯努力はして語つてくれた。が努力の割に酬はれるところの少なかつたのは藝力の問題よりも、あゝいふえげつないカットに崇られたものと痛恨にたへぬ。

かういふひどいカットは、第一にまづ語手が語物と眞剣に取り組む愛と熱情とをすつかり奪つてしまふ。聽手に筋が通るとか通らぬとかいふやうな事は第二義的の問題であらう。こんなつきはぎだらけのものを語らしてみたまへ、いくら古靱大夫でも往年のやうな成果をあげ得たらうか？と私は疑ふ。

呪ふべきは眼先の算盤本位の、無定見な良心のないカットの濫用——。

前半がそのまま語られてこそ、武智氏のお説の如く近松の時代における戀愛の占めた位地に着眼し、戀愛中心に俊寛を描き出し、徳川時代の人間主義者近松の眞の意圖を、再現せ

むとする特色が濃厚に出るのであらうが、「語るも戀きくも戀など——」に今一ツ物足りなさを感じた不満も、さらさら無理もない仕儀とむしろ同情した位である。

この曲については八百藏の演じた歌舞伎の型を、武智氏が委曲をつくして書いておられる。人形淨瑠璃と歌舞伎の相違こそあれ、根本の解釋に些かけじめはないはずで、あれはそのまま淨瑠璃を語る時の規範とし玉條とすべきが當然で、織大夫も師傳以外あれを唯一の指導目標としてやつてゐるらしく、忠實に信奉して演じてゐるものと思はれたが、只一つだけ段切の「思ひ切つても凡夫心」だけにはいくら考へ直してみても納得が行きかねた。

織大夫はここを急き込み氣味に掴むで、捨てるやうに語つた。この演奏方から察するとこの文句に演者はあまり重點をおいてゐないやうに思はれたが、これが私にはもの足りなかつたのである。織大夫が自己流で語つてゐぬ限り、おそらく古観がこの前に語つた時もあるいふ演じ方だつたのだと思はなければならぬが、遺憾乍らはつきりした記憶はないけれど、どうもああいふ風ではなかつたと思はれてならない。私があの時古観の鬼界ヶ島に一番惹きつけられたのは段切で俊寛の寂寥に生きぬかむとするいちらしい覺悟、諦めても諦め切れない執着になやむ人間性の眞實、運命に抗争死闘する意力の悲壯さ、そういう切ない心が「あの思ひ切つても凡夫

心」に集中されて、同じ日に語られた紋下津大夫の「双蝶々」の「橋本」の段の駕の甚兵衛が演者の生地と役柄と融け合つて父性愛の極致の描出の感銘にも遙に増した、人情味以上の深刻悲痛の魂の苦惱として、聴手の胸奥に強くアツピールする力強いあるものを與へられたのみならず、義大夫的センチメンタリズムを揚棄し深刻莊重に餘情深く語られた段切の感銘は、當時ある人生問題に悩みぬいてゐた私にとつて何よりありがたい一ツの救ひでさへあつた。

赦免の便がきてからの短時間の間に目まぐるしく奔轉した運命の惡戯、それがために激情の嵐にもみぬかれた揚句にやつと到達した一種の諦觀——聖境——自己を捨てて若い人達の戀愛完成をいのる博大な愛他心、自己満足のヒロイックな氣持が舟の遠ざかり行くに従つて次第に崩れて行く。思ひ切つても切られぬ凡夫の妄執！

かくて私はここを一段中の一番要のききどころと思つてゐる。段切をそんなに重くみることは、淨瑠璃道の常識はづれかとも思ふし、段切にそういふどつしりした重い大きい表現を要求するのは間違つてゐるだらう。従つて織大夫がああ語るのも師古観の衣鉢を忠實に祖述してゐるのだらうと推定されるにも拘らず、何かしつくりせぬ不満を感じさせられるのは十數年前古観によつて異常な感動を與へられた私の耳と心はそれ以來織大夫のそれとは違つた一ツの規範的な表現型態を

勝手に頭の中にこしらへてゐたかららしい。そんならどういふ風だつたか、と反問されても返答に窮するわけだが、少くとも織大夫のやうな急迫した叩きつけるやうなテンポのきついものではなかつたとだけは言へるやうに思ふ。もつともつと腹の底から絞り出す魂のうめきに似た、沈痛な響きが心に滲みこむのである。それは孤獨地獄のさみしさにたへ

きれぬ不斷煩惱の血涙の絶叫であり、永劫の人間苦惱の象徴的表現として完成したものであつたかのやうに、私には追想されるのである。ここをこう語る事によつてこの一段が、はじめて偉大なる人間哀詩として畫龍點睛され、独自の光芒を放つに至るものと思はれるのである。

謠曲俊寛と平家女護島

森

ほ の ほ

鬼界ヶ島の俊寛を取扱つたものに、古くは舞の本(幸若)の「硫黄ヶ島」がある。これは平家物語にある「康頼祝詞の事」のくだり——即ち康頼が熊野三所権現を勸請して歸洛を祈る一小部分だけを潤色したもので、「赦し文」や「足摺り」の俊寛を中心とした最高調の場面には及んでゐないのである。

謠曲の「俊寛」は勿論その後に出來たのであるが、幸若の影響を受けてゐさうで、それとは全く別なもので、同じく平家物語に依つても、それは俊寛を中心とする「赦し文」から「足摺り」のくだりで、幸若の「硫黄ヶ島」に比べると、彼

の平面的に對してこれは立體的であり、彼の諷ひ物風に對してこれは劇的である。謠曲の方でも古くは硫黄ヶ島(或は鬼界ヶ島、俊寛僧都)と呼んだが、今は觀世始め寶生、金剛のいづれも「俊寛」、喜多だけが「鬼界ヶ島」と名づけてゐる。世阿彌の作と傳へられ、習物(九番習初傳)の一つである。

觀世流などに落葉の傳(木の葉の傳)の小書を附ける時がある。この場合には、俊寛が述懐のくだりの中の「落つる木の葉の盃」の處で、普通は散つて來る木の葉を手先、或は扇